



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第五十五号）

春分 しゅんぶん

三月二十日



文 千種清美

さざれ石

卒業式の頃となりました。卒業証書を抱えた卒業生の姿を見かけると、うれして悲しい思いがよみがえってきます。卒業式には今も国歌斉唱は欠かせないようです。

国歌「君が代」は明治生まれ。同十三年（一八八〇）に宮内省式部寮雅楽部が作曲したもので、作者は古歌とあり、不詳です。のちに小学校の祝祭日の儀式用唱歌として歌われるようになりました。実はこの「君が代」は二代目。初代は十数年前に英国軍楽隊の楽長のフェントンが「君が代」の歌詞に曲をつけていたのです。そして薩摩藩士が軍楽隊を結成して、横浜のお寺で吹奏楽の練習をしていたといえますから、西洋の文化が流入してきた明治の時代というものを感じます。その初代「君が代」を聞いてみると、歌詞とメロディが合わず、それこそ洋風と和風をミックスしたような不思議な曲でした。

君が代は 千代に八千代に

さざれ石の 巖となりて

苔のむすまで

歌詞はとてもシンプルですが、私は長い間、「巖となりて」を「岩音鳴りて」と勘違いしていました。歌詞に詠まれた「さざれ石」がどういうものがわかっていなかったからです。石灰質角礫岩という学名がついた「さざれ石」は、石灰岩が長い間に雨水で溶解されて生じた粘着力の強い乳状液が次第に小石を凝り固め、だんだんと巨石となったもの。先日、神宮会館の植え込みにある「さざれ石」を見せてもらいました。大人がようやく一抱えできる大きさで、なるほど表面に小石がたくさんついています。小石が集まって大きな石となる、その悠久の時間が「さざれ石」にはしっかりと刻まれていました。